

読みの文体

— 延慶本平家物語論のために —

山下 宏 明

『平家物語』には、読み本（非当道系）と語り本（当道系）という、表現論の見地から言つて全く異質のあり方が一つの物語をめぐつて存在する。おそらく他に類例を見ないところであろう。この点をめぐつて、これまで多少触れるところがあつたが、この両系統の本文の、決定的な相違点の一つとして、平家の悪行が積み重なつて、福原遷都を見るに至つた段階で動き始めた源頼朝の関東拳兵の経過を語る部分⁽¹⁾をあげるべきであろう。諸本分類の第一段階の作業として、諸本を、この語り系と読み系とに分ける作業があるが、一部のとり合わせ本を除く限り、まず、この頼朝の拳兵をどのように扱っているかによつて、この両系統を区別することができる。その違いを一口で言つてしまふなら、語り本系は、この頼朝の動きを、京都にあつて、大庭からの早馬によつて報される形をとる。つまり、それを報されるのは、京にいた平家の側である。物語の語り手は、京都にいた平家の側に視点をずえて、東国から早馬を迎える形で語る。それが読み本では、語り手は、関東の側に視点を移す。この両系の違いをめぐつてその語りの成立基

盤を考えるのが一つの考え方である。今一つには、それを物語の視角の問題としてとらえる論⁽²⁾がある。そして、実はこの二つの見方は、例えば『将門記』の成立論にも見られるように、重なるもので、軍記物語の造形のあり方にかかわる。土豪の一門が対立する関東において、その紛争を、その内部にあつてとらえるがゆえに、その語り手は、関東の視角を以てとらえたのだと。もつとも現実には、これら読み本にも、京にいて大庭早馬の報せを受ける場面を併せ描いているので、読み本そのものを関東地方の成立とは即断しがたい。

本稿では、そのような成立論をくり返すことはさしひかえて、東國的な視角を持ち込んだことが、読み本の世界を、どのような物語たらしめたかという、物語論にしばつて考察する。

この課題に、もつとも鮮明な形で答えてくれるのが、読み本の中でも、延慶本である。

二

頼朝の拳兵を見るのに、どうしても無視できないのが文覚という人物である。ところでこの頼朝が兵を挙げる前、文覚は、発願した神護

寺の再建を実現するために勸進を行い、それに従事する中、院の御所で狼藉を働く。その結果、伊豆へ流されることになる。その流罪の直接のきっかけをなしたのが、その前に一度手痛いのがめにあつていた院当局に対して、

シハシハ引籠リテ有ヘケレトモ猶モヘラス如元ニ勸アリキケリサ
ラハタ、モナクテ此ノ世ノ中ハ只今ニ乱レテ君モ臣モ皆滅ナムスル
者ヲナトサマ、ノ荒言放テイマ、ノシキ事ヲソ云アリキケル

その後も度重なる狼藉に当局も放っておかず文覚を伊豆へ流したというのである。この時点で文覚に、はたしてこの後の世の乱れを見通す力があつたかどうかはわからない。しかし物語としては、これまで平家の積み重なる悪行を描いて来たのであるから、ここに位置付けされる文覚は、その先行きを見通さねばならぬはずである。たゞここで文覚が対決しようとしているのが、平家ならぬ院であるところに、この後の物語の展開する方向とは、あるずれを感じさせる。しかしこれまで、物語の方向としては自然で破綻が無い。

その文覚が、那古耶寺に草堂を建て、毘沙門をすえて折つたのが、平家ヲ呪詛シケリ

である。これは、上述もしたように、この文覚をして、平家滅亡に一役演じさせようとする以上、当然の行動であらう。事実、語り本においては、すでに以仁王からの命令が下っていたにもかかわらず、頼朝をして拳兵に踏み切らせる、その直接の仕掛け人になるのが文覚である。そのような歴史の重要な役割をになうにふさわしい人物たらしめ

るために、この文覚を尋常な人物でない、「刃の験者」であることを那智での荒行や、伊豆流罪の際の船中の豪胆なふるまいに、説話的人間として語つて来たのである。⁽⁶⁾

しかるに延慶本では、この文覚の演ずる役割に微妙なずれが見られる。それは文覚の仕掛けを受けとめる頼朝の描きようにかかわる。すなわち、文覚は湯屋を建て、人々に入浴させる。そこへ一人の男が訪ねて来る。実は頼朝なのであるが、下人から、それと教えられた文覚は、忍ヤカニ是ハ流レテオワシマスナル兵衛佐殿歟

と問いかける。頼朝が返答に窮し、にが笑っているのを見ると、文学コレソ此入道カ相伝ノ主ヨ

と、ただちに接近を開始し、頼朝にその意中をうち明ける。さすがに頼朝は、回りの人々の耳をはばかり立ち去るが、その直前、頼朝の付人が、

立返テ里ニハ出タラム時ニハ必尋テオワセヨト文学カ耳ニサ、ヤ
キケレハ

と布石を打っている。以後、頼朝は湯に立ち寄らない。三十日後に、文覚が里へ出たついでに頼朝を訪ねる。その文覚に対し頼朝の側から、サテ御房今日ハ閑ニ居テ世間ノ物語シテ遊給ヘツレ、ナルニト要求する。ここでようやく文覚は頼朝に謀叛を促すことになる。つまりここでは、主客の位置が覚一本とは逆転して、頼朝の方がリードして行く。そのため頼朝は、

佐被思ケルハ此聖ハ心深ク怖シキ者ニテ流サル、程ノ者ナレハカ

ク語ヨリテモ、ロク、相従ハ頼朝カ頸ヲ取テ平家ニ献リテ己カ罪ヲ遁
トテハカルヤラム

と思い、叛意無しと答えながら、実は

心中ニハ南元八幡大菩薩伊豆管根両権現願ハ神力ヲ与給ヘ多年ノ
宿望ヲ遂テ且ハ君臣ノ御禮ヲ休メ奉リ且ハ亡父カ素懷ヲ遂ムト志
深ケレハ

と、期するところがあつたと言う。語り本ではこの頼朝の内心を語ら
ないため、事は、もっぱら文覚の行動に促されることによつて進む。
それどころか、頼朝は、

あつばれ、此聖御房は、なまじひに由無き事申し出して、頼朝又
如何なる憂き目にか会はんずらん

と逃げ腰である。とにかく本心を明かそうとしない頼朝を行動へと踏
み切らせるのが、仕掛け人としての文覚であることになる。それが延
慶本では、見て来たように、頼朝は文覚に疑心を抱きながらも、いち
早く頼朝の側に期するところがあるわけで、この行動のきつかけを作
る者としての文覚が位置付けされる。さればこそ、又の日には、頼朝は、
実は勅勘を赦されんことを考えていることを語り、藤九郎盛長を供に
して三島の社へ一千日の夜参りをし、その満願の夜、平家の人々の首
が懸けられるという吉夢を見たとも明かすのである。この文覚との対
面の場では、語り本における頼朝が全く逃げ腰で、文覚に押しまくら
れるのに対して、延慶本における頼朝は、むしろ頼朝の側に、拳兵の
心づもりのあつたことを語り、文覚に対する警戒の念は持ちながらも、

むしろこれを勅勘をゆるされるための手がかりとして積極的に使おう
とすらしている。これまでの物語の文脈から言って、文覚がこの場の
主役であるはずであるが、この延慶本に見る話では、むしろ頼朝の側
に主役が移っているとさえ言えるであろう。詳しい成立論に立ち入る
のは、避けたいが、前後の文脈から言ってこの読み本の展開には、ね
じれがあると言うべきで、改作の可能性が高い。

三

以下、この文覚のもたらした院宣を契機として頼朝の兵が動き始め
るのであるが、その緒戦、屋牧（山木、八牧とも）攻めをめぐって、
一向に事の進まないのを不安に思う頼朝を見た加藤景廉が、

ヤカテ甲ノ緒ヲシメテツト出ケルヲ兵衛佐景廉ヲ召返テ銀ノヒル
マキシタル小長大刀ヲ手カラ取出給テ是ニテ兼隆カ首ヲ貫テ参レ
トテ景廉ニタフ

この頼朝と加藤との関係には、事態を困難の中に自らの行動力を以つ
て局面の打開をはかろうとする英雄としての頼朝像を描くのではな
く、むしろこの頼朝を自らの行動の核、拠り所として、いわばその主
君に奉仕する従者としての加藤の献身を語るものである。言いかえれ
ば、この頼朝は行動の主体としてよりは、むしろ家来たちに奉仕され
る、多分に偶像化した象徴的な存在に化している。つまりこの頼朝像
には、天下平定の過程にあつて、苦難を自らに課す英雄としてよりは、
象徴的な王者にずれを見せている。さらに言うならば、この延慶本の

物語を語る物語的構想において、すでに後日、天下を平定した段階の頼朝像が先行してしまつて⁽⁸⁾いる。その意味で、鎌倉幕府が開幕して後、幕府の公的記録を志して、開幕を迎えるまでの苦難の経過を逆照射する形で記録を構成した『吾妻鏡』の姿勢と重なるものがある。この延慶本の頼朝像は『吾妻鏡』の例えば、まさしくこの山木(屋牧)攻めを記す治承四年八月六日の条に、頼朝が工藤ら(例の加藤景康も名を列ねる)を、

次第召ニ抜閑所一令レ議ニ合戦間事一給、雖レ未ニ口外一、偏依レ恃レ汝、被ニ仰合一之由、毎レ人被レ竭ニ懇懃御詞一之間、皆

喜ニ一身抜群之御芳志ニ面々欲レ励ニ勇敢一

とするのと相通じる姿勢である。言いかえれば、一見緊迫感に満ちていながら、頼朝の主人としての立場はすでに出来上つてしまつていゝ。鎌倉幕府の政權担当者としての像が、それまでの苦難の経過を逆照射する形を呈している。加藤が八牧(山木、屋牧)を討ちとり、
法花経ヲ一字モヨマヌ加藤次カ八局ノハテヲ今ミツルカナ
と、狂歌をものにするという笑いも、見て来たように、後日を十分に見通した、と言うよりも事が成つて後の側からふり返つて、加藤の行動を語るといふ余裕が、この笑いを保障していると言つてよいだろう。

四

余裕といへば、頼朝の命令により佐奈多与一が、大庭勢の俣野五郎と対決するが、与一の家来又三家安と波屋庄司重国のことば争いの上で家安が、

矢一筋奉ラムトテ鶴ノ本白黒塗ノ十三束ヲ吉ヒキテ射タリケレハ
甲ノ手崎ニ立ニケリ其時敵モ御方モ一同ニハトソ咲ケル

と言うし、やがて佐奈多と俣野が暗闇の中で組み討ちするが、上になり下になり

山ノソワヲ下リニ大道マテ三段計リコロヒタル今一返シモ返シタ
ラハ海へ入テマシ

兩人をとりまく郎等どもは、なにぶんにも暗闇の中であるので、いずれをいずれと見分けがつかない。兩人たがいに、「上が佐奈多だ」、「いや下が佐奈多だ」、「上が俣野だ」、「いや下が俣野だ」と言い合う。ようやく佐奈多が起き上り、側にいた長尾新五を蹴とばす。そして刀で俣野の首を斬りつけるが、切れない。実は、鞘さしのまま斬りつけていたのであった。ようやく新五の弟新六がかけつけ、逆に佐奈多を討ちとる。俣野を引き起こして様子を見たが、俣野が、討たれた佐奈多の手に握られていた刀を取つて見ると、

鞘尻一寸計リヌケタル刀ヲソ持タリケル

おかげで、俣野は

頭コソスコシシヒテ覚^つ

え、
其手ライタミテ

戦鬪を止めたと言う。この佐奈多と俣野兩人の組み討ちを、それを展開する語り手の姿勢を想定した場合、それは明らかに高見の見物であり、兩人の組み討ちを、まるで競技を見るような余裕と笑いを以て受けとめている。この余裕の由つて来るところは、この組み討ちに先立ち、頼朝から俣野に組めと命ぜられた佐奈多与一が、母と女房に使者を送り、

義忠(与一のこと)今日ノ軍ノ先陣ヲ懸ヘキヨシ兵衛佐殿被仰一
間先陣仕ヘシ生テ二度不可帰一若兵衛佐世ヲ打取給ハ、二人ノ子
共佐殿ニ参テ岡崎ト佐奈多トヲ継セテ子共ノ後見シテ義忠カ後世
ヲ訪テタヘ

と言わせ、この後、敵との組み討ちに際しても、名乗りをして、

源氏ノ世ヲ執給ヘキ軍ノ先陣也

と言わせ、事実、結果的に頼朝も、与一の死をいたんで、

アタラ兵ヲ討セタルコソ口惜ケレ若頼朝世ニアラハ義忠カ孝養ヲ
ハ頼朝スヘシトテアワレケニ思ワレタリ

と言う。明らかに、頼朝の天下平定の時点からの逆照射によるものである。この後、追いつめられた頼朝の一行は、梶山へ難を避けるが、
ここでも

サテ兵衛佐ハ山ノ峯ニ上リテ臥木ノ在ケルニ尻打懸テ被居タリケ
ル二人々跡ヲ尋テ少々来リタリケレハ大庭曾我ナムトハ山ノ案内

読みの文体——延慶本平家物語論のために——(山下)

者ナレハ定テ山フマセムスラム人多テハ中々悪カリナム各是ヨリ
散々ニナルヘシ我若世ニアラハ必ス尋来ルヘシ我モ又可尋ト宣ケ
レハ

と頼朝は言っている。

言いかえれば、後日の時点からそれまでの経過をふり返り、位置付けする語りと言うべきで、そこから、頼朝の目的源氏再興に、どのような苦難があり、どのような人々の行動があったか、頼朝に対しどのような忠節を尽したかという軍忠状をいくさ語りとして語るものが、これらの話である。そのため、上述して来たところもそうであるが、この後、頼朝の石橋山合戦敗戦の報に接した三浦、畠山の両軍の戦鬪には、個人技が目につき、頼朝に対する勲功談の形をなしている。

五

その中でも特に目につくのが、三浦大介義明の、衣笠城での合戦である。義明の孫、和田義盛が、衣笠城での決戦を不利と見て奴田城で戦おうとするのを、

大介(義明)云ケルハサカシキ冠者ノ云事哉今ハ日本国ヲ敵ニテ
打死ニセムト思ワムワムスルニ同ハ名所ノ城ニテコソ死タケレ先
祖ノ聞ユル館ニテ討死シテケリトコソ平家ニモ聞カレ申タケレト
云ケレハ尤可然トテ衣笠城ニ籠ニケリ

と、頼朝への忠節に献身する覚悟を見せる。やがて武蔵の江戸から二十余騎が攻め寄せ、城内と矢戦の攻防をくりひろげ、

城中ヨリ例ノ矢前ヲソロヘテ射ケレトモ金子少モ退カス廿一マテ立タル矢ヲハ折懸々々シテ戦ケリ其時城中ヨリ是ヲ感シテ酒^{マツ}希^{マツ}ヲ一具家忠^カ許^ヘ送^テ云ケルハ殿原ノ軍ノ様誠ニ面白^クミヘタリ此酒メシテ力付テ手ノキハ軍シ給ヘト云送りケレハ金子返事ニ申ケルハサ承候又能々飲テ城ヲハ只今ニ追落申スヘシトテ

戦う。この余裕のあるいくさ語りは、頼朝に忠節を尽すことを説く、講釈の文体であると言ふべきであろう。勿論、この忠節を講釈する背後に、頼朝が天下を平定して後からの逆照射のあることは言うまでもない。結局、三浦軍は追いつめられる。ここで大介義明は弱気になるが、各左右ナク自害スヘカラス兵衛佐殿ハ荒量ニ被打一給マシキ人ノ佐殿ノ死生ヲ聞定メム程ハ甲斐ナキ命ヲ生テ始終ヲ見ハテ奉ルヘシイカニモ安房上総ノ方ヘソ落給ヌラム今夜コ、ヲ引テ船ニ乗テ佐殿ノ行エヲ尋奉ヘシ

と、やはり頼朝の後日を見通し、自らは老令なるゆえにと一人とどまり、七十九歳(八十四とも)にて、江戸の手にかかつて討たれるのである。頼朝の将来を思い、それをあらせるために一門に忠節を説く、講釈の姿勢がこの義明のことばをも貫いている。ちなみにこの義明の最期の決意の様は、『吾妻鏡』の治承四年八月二十六日の条に

今両日合戦、力病矢尽、臨ニ半更一捨レ城逃去、欲レ相ニ具義明一々々云、吾為ニ源家累代家人一、幸逢ニ于其貴種再興之秋一也、蓋レ喜レ之哉、所レ保已八旬有余也、計ニ余算一不レ幾、今投ニ老命於武衛一欲レ募ニ子孫之勲功一、汝等急退去今、可レ奉レ尋

ニ彼存亡一、吾独残ニ留于城郭一、摸ニ多軍之勢一、令レ見ニ重頼ニ云々、義澄以下涕泣雖レ失レ度、任レ命以離散訖、

とし、翌二十七日、年八十九歳で討死したことを記録すると、全く同じあり方である。鎌倉幕府実現の段階で、これまでの経過を逆照射して公的な記録とした『吾妻鏡』と同じ姿勢がこの延慶本に見られると言ふべきであろう。

一方、頼朝の一行は、

土肥ノ鍛冶屋^カ入ト云山ニ籠テオワシケルカ

その山中から、土肥真平の邸の方を見やると、平家方の伊東入道が土肥に押し入り、

真平カ家ヲ追捕シ焼払ケリ真平山ノ峯ヨリ遙ニ見下シテ

土肥に立ち上る火をも「三ノ光アリ」とし、

第一ノ光ハ八幡大菩薩ノ君ヲ守奉リ給御光也次ノ光ハ君御繁昌ア

テ一天四海ヲ耀シ給ワムスル御光也次ノ小光ハ真平カ君ノ御恩ニ依テ放光セムスル光ナリ

とし、頼朝との主従の結び付きによる、主君への祝言であるとす。

やがて真平の妻からの使者があり、三浦勢が衣笠城の合戦に敗れ、主君を求めて安房国へ赴いた。「急キ彼人々ニ落加リ給ヘシ」と進言する。

この真平の妻の指示により一行は、海路、安房へ渡ることになるのであるが、このように三浦・土肥、その妻の三者の頼朝への献身が、主君頼朝を栄光の座へと導くことを語る構造を示す。やがて頼朝らの一行は、海人舟で安房へ渡るが、七人ともに烏帽子を着ていない。王朝

時代以来、烏帽子を着用しないことは、男子としての資格、自立性を喪失することであるから、せひとも入手しなければならぬ。その要請によって、その浦に住む古老、二郎大夫が召され烏帽子を献上するが、喜んだ頼朝は、

此ノ勳賞ニハ国ニテモ庄ニテモ汝カ乞ニ依ヘシ

と言う。烏帽子をも持たぬ落人の分際で、国や庄を預けると言明する頼朝の広量な態度を二郎は笑ったと言うのももつともであるが、ここにも、すでに頼朝の將軍としての風格を見せるもので、これら頼朝輩下の、その主君に対する祝言、人々の献身、これら家来たちの行動に報いようとする頼朝の態度ともども、いずれも、やはり後日、頼朝が將軍職に就いて後の側からの逆照射によるものと見るべきであろう。結果の見える語り手の語りは、主従の交りを描いて美しく、その主君の態度もおおらかである。

六

以下、主君の行方を尋ね求める三浦の一行の頼朝との再会へと進むが、物語にかれらがいかにかに主君にめぐり会うか、その経過を逐い描くもので、そのためかれら主従の間にもやはり主君に対する奉公が、あるべき道として固定し描かれている。

主君の身の上を案じ、不安な中に安房へ着いた三浦の一行は、やがて沖に浮かぶ一艘の舟に気づく。もしや主君の舟かと期待する一方、

又敵ノ船ニテヤ有ラムトテ弓絃シメシテ用心シテ有ケルニ

読みの文体——延慶本平家物語論のために——(山下)

舟は次第に接近し、ようやく互いに相手の笠じるしを見てそれと知り、舟を寄せ会う。再会を喜び会うとともに、この二日間の戦闘に三浦大介の言い残したこと(上述したように、主君の源氏再興を期待しつつ、自らは老令のために死を選んだこと)、佐奈多与一の討死したことなどを語り涙を流す。これまで頼朝は「猶用心シテ」「打板ノ下ニ隠奉リテソレカ上ニ殿原ナミ居タリ」。しかしこれら人々の話すのを聴いて、

兵衛佐ハ打板ノ下ニテ是ヲ聞給テ哀世ニアリテ是等ニ恩ヲセハヤ
トソサマノ被思ケル

そして、ついに、

イタク久隠レテ是等ニ恨ラレシトテ頼朝ハコ、ニアルハトテ打板
ノ下ヨリ出給タリケレハ三浦ノ人々は見奉リテ各悦泣共シアヒ
ケリ

となる。この両方の人々の互いに相手の身を案じつつ、めぐり会うまでの経過を対象化して語るもので、それらを支えるものが、やはり主従の恩愛である。それらは、やはりくり返し指摘して来たように、後日の頼朝が栄光の座に着いた段階から逆照射して、三浦らがどのように主君に対して献身的に行動したかを主従の恩愛物語として構成し、その臣下としての道を説く講釈の文体をなすものである。ここでも、和田小太郎は、たとえ肉身の人々を失うことがあると、

只今君ヲ見奉リツレハ其ニ過タル悦ナシ
と喜び、

今ハ本意ヲ遂ム事不有疑

として、いち早く

君今ハ只侍共ニ国々ヲ分チ給ヘシ義盛ニハ侍ノ別当ヲ給ヘシ

と主君に迫る。一方、頼朝は、

所アテ余リニ早シトヨトテ咲給ニケリ

と言ひ、ここでも栄光の座をあるべきことと見て語りは進んでいる。

やがて頼朝の一行は、安洲大明神に参り祈願し

源ハ同流ソ石清水セキアケ給ヘ雲ノ上マテ

と詠んで神に捧げると、その夜、宝殿から気高い声で、

千尋マテ深クタノミテ石清水只セキ上ヨ雲ノ上マテ

と神託があつて、頼朝の栄光を予告する。

頼朝は上総介弘経と千葉胤経とに使者を送り、頼朝の一行に馳せ参るよう促す。胤経はただちに参るが、弘経は遅れる。弘経はその地の平家に味方する者を討ち取り一万余騎を引き具しようやく上総の国府で一行のもとに参るが、頼朝は眞平をして、弘経に会わせ、

今マテ遅参之条存外ナレトモ沙汰ノ次第尤神妙也

と、馳せ参つたことを神妙とはしながら、遅参を存外とがめることを忘れない。この頼朝のとがめを聞き弘経は、一門の待機する陣に帰つて、

家子郎等ニ向テ申ケルハ此ノ兵衛佐ハ一定ノ大將軍也弘経此程ノ

多勢ヲ卒シテ向タラムニハ悦感シテ急出合テ耳ト口ト指合テサ、

ヤキ追従事ナムトヲコソ宣ワムスラムト思ツルニ眞平ヲ以テ宣タ

リツル一ニハヲホケナク一ニハ大クワイナ心也誰人ニモヨモ荒量ニ
ハカラレシ給ワシ一定本意ハ遂給ワムスラム

と驚嘆している。頼朝が、いかに大将にふさわしい器量の人物である

かを語るのがあるが、それゆえに「一定本意ハ遂給ワムスラム」と、

やはり後日の栄光を見通す。実は、この場合についても、『吾妻鏡』

の治承四年九月十九日の条に、同様の経過を記す記録が見える。すな

わち、広常は、二万騎を率いて隅田川の辺りで頼朝に見参するが、頼

朝は、その遅参に對し大いに立腹の様子である。ここで広常は、頼朝

の現状がきわめて不安定であること、その周りには、あわよくば頼朝

を討ち取り平家に忠義だてしようとする者が出てても不思議ではない。

実は広経自身も、去從に迷つていたのである。頼朝に会つてその窮状

を見るにつけても、さぞかし広常の参加を喜ばれるものと思つていた

ところ、案に相違して叱責される。この頼朝の対応のしよを見て、

広常は、

殆叶二人主之躰一也

つまり、これこそ大将の器であることを知り、

依レ之忽変ニ苦心一奉ニ和順一云々

と言ふ。しかもこゝで將門の叛乱當時を回想し、追いつめられて窮した將門が、藤原秀郷の馳せ参つたのを喜び迎える。秀郷はこの將門の応待のしよを見て、

見ニ其輕骨一、存下可ニ誅罰一之趣上追出

やがて本意通り將門の首を取つたという話を想起する。この將門に比

べて頼朝の器を評価するのであるが、同じこの将門の回想が、延慶本の広経遅参の場面にも見られる。上述した所でも指摘したように、延慶本の、この頼朝拳兵を描く部分には、『吾妻鏡』と重なる場面が多い。この両者の関係を限定することはさしひかえたいが、『吾妻鏡』の場面をも含めて、これらの話を、客観的な史実の記録と読むべきではない。見て来たような、頼朝の後日の栄光を見届け、その時点から、頼朝が関東を支配下に置くまでの経過を逆照射して語るものである。まさしく鎌倉幕府の公式記録にふさわしい。この姿勢が、このように頼朝を大将の器量ある者と語らしめたと見るべきであろう。つまり、これらの、頼朝の拳兵の経過を語るくだりを、現実にその拳兵の経過を記録的に記したと見るべきではない。鎌倉幕府の公式記録としての『吾妻鏡』が、かなりの脚色、虚構を含むことは、すでに指摘されているところであるが、ここでは延慶本がやはり頼朝の拳兵から事の成就を描く頼朝物語、つまり頼朝の果報めでたき物語を構成しているもの⁽¹⁰⁾と考へる。

かくて頼朝の歩むべき道は、すでに決定している。

又兵衛佐宣ケルハ平家ノ嫡孫小松少将惟盛ヲ大將軍トシテ五万余
騎ニテ上総守忠清ヲ先陣ニテ斎藤別当実盛ヲ東國ノ案内者トシテ
下ヘキヨシ風聞ス

と平維盛らの出陣を頼朝が察知し、これを富士川で迎え撃とうとすることを語るのも、これまでの物語の姿勢から推して、きわめて自然な運びである。それまで平家側に従って来た江戸らが完全に頼朝に帰順

し、畠山もこの時点で頼朝の上昇の勢いに驚嘆し、降伏して来る。頼朝は、土肥らの意見を徴した上で、

サラハ我日本国ヲ討平ケムホトハ、一向先陣ヲ勤ヘシ

と励ますのも、すでに將軍としての地盤を獲得したに等しい身の処しようである。延慶本における頼朝は、苦難の中に自らの道を切り拓いて行く英雄ではなく、すでに大王としての風格を備えきっている。

七

読み本の特色をなす頼朝拳兵の経過を語る話を、その典型とも言うべき延慶本に即して見て来た。今、これを成立論にかかわらせることは避けるが、その詳細な経過の語りが、必ずしも、現実に頼朝が鎌倉に拠点を占めるまでの苦難を記録したものではなく、頼朝をめぐるその周辺の人々の、主君に対する献身的な行動を、頼朝を核とし、その主従の間の交情を語ることで物語たらしめていること、それは、明らかに、後日、頼朝が栄光の座を占めて以後の視点からの逆照射によって、拳兵から関東をその傘下に置くまでの過程でなされた人々の献身を語る物語であることを論じて来た。その文体は、登場人物の、苦難の中に行く先をその自らの行動力を以て手探りして行く、苦難に満ちてはいるが力強い主人公を描く文体ではなく、行く先を見届けた、高所からする、余裕に満ちた、そして人々に臣下としての忠節の道を説く、高座からの講釈の文体である。読みとは、この講釈の文体をなすものである。かくて、軍記物語における成立基盤の問題は、いくさ語

りを語る視点や視角を決定するのみならず、その物語の姿勢、文体をも規定する。その意味で、成立論の課題は、物語表現論の課題にも通ずる。

- 注(1) 「平家物語の語りと読みに関する試論」(『金城学院大学論集』昭和39年七月、『平家物語研究序説』再録)。特に兵藤裕己氏の「軍記物の流動と語り」——平家物語論のために——(『国語と国文学』昭和54年一月)は、文体面での現代批評の一環としてこれを掘り下げたものである。
- (2) 山下の「源平闘諍録管見——其の成立基盤をめぐって——」(『国語と国文学』昭和36年八月、『平家物語研究序説』再録)
- (3) 麻原美子氏「平家物語の視角——本文系統論をめぐって——」(『文学』昭和45年六月)
- (4) 永積安明氏の「将門記」成立論(『文学』昭和54年一月)
- (5) 西尾光一氏「平家物語における文学的人間像の成立」(『文学』昭和28年九月)
- (6) 覚一本の成果で、古本には見られない
- (7) 山下は、かつて、これら読み本の世界を『吾妻鏡』と比較しつつ、「東国の資料を持ちこみながらも、各武将の利害へと主題を拡散することなくもっぱら頼朝へと集約する形で展開している」とした。「吾妻鏡と平家物語」(『解釈と鑑賞』昭和46年二月)。「軍記物語と語り物文芸」再録)
- (8) 松尾葦江氏「長門本・延慶本・盛衰記の平氏断絶記事について——読み本系とは何かを考えるために——」(『軍記と語り物』8号 昭和46年四月)が、延慶本をめぐって「一時代に対する解釈が確定しているようにおもわれる。延慶本の作者と読者にとって、そこにあるのは、すでに落着いた世界なのだ」とされたのと重なる。
- (9) 山下「平家物語と吾妻鏡——『平家』生成論への手がかりとして——」(『軍語と語り物』8号 昭和46年四月)

(10) 延慶本が物語の末尾に「右大将頼朝果報目出来」を以て結んでいることと、無縁でないことは、前項(9)の拙稿でも指摘している。